

## お わ り に

本研究がこの主題を掲げて2年目であるということのほか、本校にはもうひとつの「2年目」があった。それは、近隣の鳥取市立湖山小学校が研究指定校として取り組んできた、「障害児との交流教育」のそれである。本校はこの交流の相手校に選ばれたので、昨年度と今年度、これに協力して来た。そして、本校の研究発表会とあい前後して、湖山小学校の研究発表会も行われることになっている。交流の中で数多くの計画が実施され、本校の児童・生徒もこれに参加して、多くのことを学んだ。そうはいふものの、本校からみれば、小学校は学級の児童数が多く、活気もあり、小人数の、保護的な空気になれた養護学校の者にとって、はじめはずい分勝手の違う経験であった。しかし、回数を重ねるにつれて親しみあい、とけあって、よい成果を挙げるに至った。その模様を、読者はこの研究実践の中に見出すであろう。その意味で、本号は記念すべき記録になった。あわせて、湖山小学校の教員諸兄に敬意を表したい。

さて、改めて今次の取り組みを眺めるに、問題点も少なくない中で、「養・訓」が依然としてわれわれのアキレス腱であることを思い知るのである。研究主題の如何にかかわらず、こうした集りをもつところは、精神薄弱児の養護学校の中で多いと思われるが、とりわけ「個に視点をあてる」ことを標榜し、認知や運動や言語に欠陥をもつ者に向き合っているわれわれにとって、このことは大きな課題である。本校でも抽出養訓を実施しているものの、それは非常勤講師によるもので、専任教員による、「自前」のものではない。こうした不満足な状況にもかかわらず、近い将来にこれを解決して、効果的に実施していける見通しも弱い。本格的な養訓の実施は、当分の間、「宿題」にとどまるのであろうか。

ただ、残された課題ばかりを数えあげることが、直ちに向上につながるわけでもないであろう。言いわけめいたことはやめて、いまは心静かに反応を待ちたいと思う。